

早稲田大学博士論文(録要)		
2011	学位記	文科省報告
5978	甲	3624

院政期真言密教をめぐる如意輪観音の造像と信仰

清水紀枝

平安時代初期、弘法大師空海は唐に渡り、密教の正統な継承者となった。帰国後に彼が確立した真言密教は、やがて奈良時代以来の旧仏教勢力を凌ぐ飛躍的な発展を遂げる。空海は様々な密教のほとけをもたらしたが、なかでも如意輪観音は、彼の直系の弟子達によつて特別に重んじられた。たとえば空海の十大弟子のひとり実恵や、孫弟子にあたる聖宝は、自らの開いた寺院の本尊を如意輪観音とし、真然は清和天皇のために毎日、如意輪観音の供養を行ったと伝えられる。さらに平安時代後期以降、天皇の即位礼をはじめとする宮中の儀礼に如意輪法が導入され、皇室の信仰とも緊密に結びついてゆく。

しかし如意輪観音に関する研究は大幅に立ち遅れており、その成立や具体的な信仰の様相については未だ不明な部分が多い。岩本裕氏により如意輪観音の原名が明らかにされ、如意宝珠への信仰に関わつて成立した可能性が指摘されているが、インドや中国での信仰や造像の実態も明らかでない。また日本の状況についても、個々の作例に関する検討はなされてきたものの、各時代における造像や信仰の様相を捉えようとする

ような、体系的な研究はほとんど行われてこなかった。

なお中国や日本における如意輪観音像は、通例、『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』(唐・金剛智訳)等の經典にもとづいた六臂の姿であらわされ、右手第二手に意のままに願いを叶えてくれる如意宝珠を、左手第三手に煩惱を破碎し法を広めるという輪宝を持つのが特徴である。すなわち「如意輪」の名は「如意宝珠」と「輪宝」を意味するもので、これらの持物の力をあわせもつた観音と解されている。

その一方で従来、日本における如意輪観音の像容が、こうした通例の姿とは異なる独自の展開を遂げていることが注目されてきた。石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍は、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた二臂像であり、如意宝珠や輪宝をもたないにもかかわらず、如意輪観音と称されている。また、中宮寺本尊をはじめ、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像の中にも、如意輪観音とよばれるものがある。このような如意輪観音像は經典に説かれず、日本以外に確実な作例が見当たらない。

しかるにこれら特異な如意輪観音の像容については、經典に典拠を求めることができないため、その思想的背景を解明することは困難であるとされてきた。これに対し本論では、これら如意輪観音の新たな像形式が現れた背景に、何らかの意図のもとにこれを主導した人物の存在を想定した。そして、その人物と同じ思想や信仰を共有する人的ネットワークによつて、この像形式が各地に伝播したのではないかと推測した。

そこで関係史料にあらためて目を向け、各作例と如意輪観音を結びつけた人物を探った結果、醍醐寺僧と中心とする人的ネットワークの存在

が浮かび上がった。醍醐寺は如意輪観音を本尊として特別に信仰する真言密教寺院である。さらにこのネットワークが、院政期の王権とも密接に結びついていたことが判明した。

なお院政期以降、醍醐寺を中心として、天皇や法皇のために如意宝珠を本尊とする修法が盛んに行われ、その本尊として宝珠をあらわした舍利容器や厨子が制作された。近年、内藤栄氏によって、この醍醐寺における宝珠信仰が如意輪観音信仰と密接に関わっていたことが指摘されている。よってこれら宝珠法に関わる仏具もまた、日本独自の如意輪観音像の展開とみなし、あらためて検討を加えることとした。

本論はこのような視点にもとづき、日本における如意輪観音像の新たな展開に目を向け、その具体的な時期や信仰の様相、これを主導した人的ネットワーク、そして仏教界の動向や王権との関わりについて考察をすすめるものである。なお、各章の概要は以下の通りである。

第一章 日本における二臂如意輪観音像の成立について

院政期に成立した密教図像集『図像抄』の如意輪観音の項には、右手を施無畏印、左手を膝上で与願印とし、左足を垂下した石山寺本尊の図像が収録される。同記事によれば石山寺本尊、およびこれと同じ形式の東大寺大仏左脇侍や岡寺本尊は、いずれも二臂如意輪観音像であるという。しかるにこのような姿の如意輪観音像は經典に説かれず、日本以外には作例が見当たらない。本章は、この特異な如意輪観音像が石山寺で

成立した問題にあらためて注目し、特に東大寺へと伝播した経緯について検討を行うものである。

なお従来、石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍が如意輪観音と称されることから、これらの造像が行われた奈良時代には、すでに如意輪観音信仰が伝来していたものとみられていた。これに対し、井上一穂氏が関係史料を精査し、奈良時代の日本では密教の変化観音としての如意輪観音への意識はまだ芽生えておらず、本格的な如意輪観音信仰が行われていなかったことを明らかにした（『奈良時代の如意輪観音信仰とその造像―石山寺像を中心に―』『美術研究』三三三、一九九二年）。よって現在では井上氏の説にもとづき、如意輪観音信仰の日本への伝来は、空海が正統な密教をもたらした平安時代以降との見方が定説となっている。さらに徳竹由明氏らの研究により、石山寺本尊の本来の尊名が「観音」であり、平安時代以降、石山寺に進出した醍醐寺僧の影響によって「如意輪観音」とよび変えられたことが指摘されてきた（『石山寺開基伝承の形成』『日本文学』五二―三、二〇〇三年）。醍醐寺は空海の孫弟子にあたる聖宝を開祖とし、如意輪観音を本尊として特別に信仰する真言密教寺院である。しかしその一方で、石山寺で成立した特異な如意輪観音像が、東大寺など他の寺院に伝播した経緯については、従来ほとんど注目されてこなかった。あらためて東大寺大仏左脇侍の尊名の変遷に着目すると、石山寺本尊と同様、当初の尊名は「観音」であり、十世紀末から十二世紀にかけて「如意輪観音」とよび変えられたことが判明した。そこで当時の東大寺の状況に目を向けた結果、この時期に醍醐寺の法流、とりわけ醍

醍醐寺僧淳祐と密接に関わる真言僧が、相次いで東大寺別当に就任していることを見出した。上述の通り、淳祐は石山寺本尊を如意輪観音と称することに関わったと考えられてきた人物である。さらに、石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍を如意輪観音であると記す図像集の編者たちもまた、淳祐を祖とする石山流を継ぐ真言僧であったことが判明した。すなわち石山寺本尊タイプの如意輪観音像が成立した背景に、醍醐寺の如意輪観音信仰が深く関わっていた可能性を指摘することとなった。

第二章 半跏思惟形の如意輪観音像の成立と醍醐寺

中宮寺の本尊は左足を踏み下げて右手の指先を頬に近づける、いわゆる半跏思惟像であるが、寺伝によれば如意輪観音であるという。法隆寺の聖霊院や広隆寺の桂宮院には広袖の衣を纏った特異な半跏思惟像が伝わり、これらもまた如意輪観音と呼ばれている。しかるに半跏思惟の姿をした如意輪観音像は經典に説かれず、日本以外に確実な事例を見出すことができない。よって、この半跏思惟形の如意輪観音像もまた、如意輪観音像の形式に関わる日本独自の展開として注目されてきた。

これら如意輪観音と称される半跏思惟像は、いずれも聖徳太子と関わりの深い寺院に安置されてきたものである。平安時代後期以降の日本には、太子の本地を如意輪観音とする信仰が存在していた。先行研究では、この本地説の影響により、太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称されるようになったものと考えられてきた。しかしそもそも、なぜ平安時

代後期に至って、太子は如意輪観音と結びつけられたのか。そして各像は、具体的にいつ頃、どのような経緯で如意輪観音と称されるようになったのか。こうした根本的な問題については、従来十分な考察が行われぬまま現在に至っている。よって本章は、半跏思惟形の如意輪観音像の成立をめぐるこれらの問題についてあらためて検討を加えるものである。まず、太子の本地を如意輪観音であると説く史料にあらためて目を向けると、これが真言宗、とりわけ醍醐寺との関わりの中で記述されていることを見出した。さらに、もともと早く如意輪観音と称された半跏思惟像として、太子ゆかりの四天王寺金堂本尊に注目した。十二世紀後半の『別尊雜記』には、編者が四天王寺金堂本尊を「私二」如意輪観音とよんだことが記されている。そこでさらに、十二世紀後半の四天王寺に目を向けたところ、『別尊雜記』の編纂に関わった守覚の師にあたる覚性が、まさにこの時期の別当に就任していたことが判明した。覚性、守覚、そして『別尊雜記』の編者心覚は、いずれも如意輪観音信仰の盛んな醍醐寺と密接な関係にあった。すなわち太子ゆかりの半跏思惟像は、彼らの周辺で如意輪観音と結びつけられたものと推測した。

なお第一章で論じたように、半跏思惟形の如意輪観音像に先行して、石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍が、醍醐寺僧淳祐の影響により如意輪観音と称されていた。これら石山寺本尊タイプの如意輪観音像は、半跏思惟像と像容の上で類似点が多く、何らかの影響関係にあったことが想定される。ここでは特に、守覚が、淳祐を祖として石山寺で成立した醍醐寺流の一派、石山流を継承していたことに注目した。

また、中宮寺、広隆寺桂宮院、法隆寺聖霊院に伝わる作例についても検討した結果、これらがみな、十三世紀後半に活躍した叡尊の影響を受けて如意輪観音と呼ばれた可能性を指摘することとなった。叡尊もまた醍醐寺の密教を根本とする僧であり、太子ゆかりの半跏思惟像は、彼によつてあらためて如意輪観音と強く結びつけられたものとみられる。すなわち半跏思惟形の如意輪観音像は、十二世紀後半から十三世紀にかけて、醍醐寺を中心とする人的ネットワークによつて生み出されたものと推察される。

第三章 醍醐寺をめぐる宝珠法の展開と如意輪観音信仰

院政期以降、醍醐寺を中心とする真言宗小野流において、天皇や法皇のために宝珠を用いた修法（以下、宝珠法）がさかんに行われた。近年、院政期の宝珠信仰、およびその本尊として制作されたと考えられる、宝珠をあらわした舍利容器や厨子への注目が高まっている。

しかし従来、そもそも、なぜ院政期に宝珠への注目が高まったのか、そして、なぜこれを主導したのが数ある寺院の中でも醍醐寺であったのか、という根本的な問題についてはほとんど論じられてこなかった。すでに述べた通り、宝珠は如意輪観音の重要な持物であり、醍醐寺は如意輪観音を本尊として特別に信仰する寺院である。

本章では、醍醐寺をめぐる宝珠法の展開とその関係作例に目を向け、特に如意輪観音信仰との関わりについて検討を行った。その結果、醍醐

寺周辺で宝珠への信仰が高まった十世紀から十二世紀にかけて、醍醐寺僧による寺院や宮中への進出を背景として、如意輪観音への注目もまた高まっていたことを見出した。さらにこの時期、勝寛や勝賢ら、とりわけ醍醐寺三宝院流の僧を中心として、如意輪観音と宝珠の結びつきが重視されていたことを明らかにした。これらをふまえ、醍醐寺をめぐる宝珠法の展開の背景に、如意輪観音信仰が密接に関わっていた可能性を論じた。

さらにまた、宝珠法との関わりが指摘されてきた摩尼宝珠曼荼羅に目を向け、これが十二世紀後半頃の醍醐寺三宝院流の祈雨法を背景に制作された可能性を指摘した。すなわち摩尼宝珠曼荼羅について、醍醐寺の如意輪観音信仰と宝珠の緊密な結びつきが、院政期において新たな発展を遂げた結果、生み出された作例であるとの見方を提示した。

第四章 後白河院をめぐる如意輪観音の造像と信仰

第二章において、四天王寺金堂本尊や中宮寺本尊など、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された問題に着目した。半跏思惟の姿をした如意輪観音像は經典に説かれず、他国にも確実な作例は見当たらない。そこで、これらの像を如意輪観音と結びつけた主体を探った結果、十二世紀後半から十三世紀にかけて活躍した、醍醐寺僧を中心とする人的ネットワークが浮かび上がった。本章ではさらに一步踏み込んで、半跏思惟形の如意輪観音像のあらわれた十二世紀後半が、後白河院政期に

あたることに注目した。

その結果、第二章で提示した半跏思惟形の如意輪観音像をめぐる人的ネットワークが、後白河院と密接な関係にあったことが明らかとなった。後白河院はとりわけ観音信仰の篤かったことで知られるが、如意輪観音信仰との関わりを示す史料も散見される。また院はしばしば醍醐寺僧に命じて宝珠法を行わせているが、第三章で論じたように、これは醍醐寺の如意輪観音信仰にもとづく修法であった可能性が高い。加えて太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された四天王寺や広隆寺に、院が積極的に関与していたことも判明した。なおこの時期、院は平氏や寺社勢力との対立によって常に危機的状况にさらされていたが、当時、太子信仰および如意輪観音信仰に共通して、王権の守護に関わる功德が期待されていたことが注目される。

すなわち十二世紀後半、聖徳太子と如意輪観音が結びつけられ、太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された背景に、後白河院が関わっていた可能性を論じた。

第五章 院政期真言密教をめぐる如意輪観音像の展開と王権

第四章では、半跏思惟の姿をした日本独自の如意輪観音像が生み出され、如意輪観音の象徴である宝珠への信仰が多様な展開を遂げる過程で、後白河院やその周辺の真言僧が重要な役割を担った可能性について論じた。

なお従来、平安時代後期以降の宮中において如意輪観音信仰が重要な位置を占め、天皇や法皇の信仰と強く結びついたことが指摘されてきた。よって本章では、如意輪観音信仰と王権の関わりに注目し、これが院政期における如意輪観音像の展開に与えた影響、およびその背景で真言宗とりわけ醍醐寺の果たした役割について考察した。

その結果、真言僧が天皇のために奉仕した仁寿殿観音供や夜居加持が、定賢や勝覚ら十二世紀の醍醐寺三宝院流の僧によって、如意輪観音信仰と結びつけられていることを見出した。当時、天台宗が天皇の即位礼における如意輪法を独占しており、両宗が独自の如意輪観音信仰をもって、皇室への接近を競っていたことが窺える。

さらにこの時期、如意輪観音は王権の守護者としての聖徳太子と団体とされ、また皇子誕生や戦勝といった、王権の獲得や守護に関わる功德も期待されるようになった。これらの新たな功德もまた、醍醐寺僧を中心として生み出された可能性を指摘した。さらに理想の帝王たる転輪聖王もまた、如意輪観音と明確に結びつけられてゆく。そしてこの説もまた、醍醐寺の口伝によるものであることが判明した。

なお上川通夫氏は、院政期の真言密教における聖教の急増や、門流とよばれる有力派閥の形成といった展開が、院権力との密接な結びつきを背景として成立していることに注目した（『院政と真言密教』『日本中世仏教形成史論』校倉書房、二〇〇七年）。そして、そうした発展の過程で、特に後白河院の子息にあたる守覚が中心的な役割を担ったことを明らかにしている。

これまでみてきたように、守覚は半跏思惟形の如意輪観音像の成立や石山寺本尊タイプ如意輪観音像の伝播、宝珠法の展開にも関与していた可能性が高い。そしてその背後には、醍醐寺の如意輪観音信仰が深く関わっていたものと推察される。その一方で、為政者たちもまた、とりわけ権力の守護に関わる如意輪観音の功德に目を向け、如意輪法の実修や関係寺院への参詣を重ねていた。

すなわち院政期における天皇や法皇が如意輪観音の功德に期待し、醍醐寺が独自の如意輪観音信仰の創出によってこれに応えようとする中で、本論で論じてきたような、他国には例のない如意輪観音像の展開が生み出されたのではないだろうか。院政期において真言密教が飛躍的な発展を遂げる過程で、醍醐寺を拠点とする如意輪観音信仰が重要な役割を果たした可能性を指摘したい。

付論 後白河院政期における「阿育王塔」の制作について

院政期の日本において、千、万という単位の多数の小塔を制作し、これを供養することが流行した。なかでも後白河院は特に熱心に小塔供養を行ったことで知られる。この問題にあらためて検討を加えた結果、後白河院政期の小塔供養の背後に、阿育王による八万四千塔建立説話が強く意識されていたこと、また当時、理想の帝王としての阿育王への注目が高まっていたことを見出した。すなわち後白河院が、自らを理想的な帝王としての阿育王になぞらえ、八万四千塔の供養を行ったことが窺え

る。加えて、後白河院政期に小塔供養を行った覚性および勝賢が、聖徳太子・如意輪観音同体信仰や宝珠法と深く関わっていたことも注目される。よってこの小塔供養もまた、第四章・第五章で論じた院政期の如意輪観音信仰と同様、王権の護持を目的として行われた可能性を指摘した。

以上の五章および付論において検討を行った結果、平安時代以降の醍醐寺が、如意輪観音信仰の拠点であっただけでなく、如意輪観音の像容に関わる展開をも主導していたことが判明した。

さらに本論の結果をふまえ、石山寺・東大寺・仁和寺・聖徳太子関係寺院（四天王寺・広隆寺・法隆寺・中宮寺・六角堂）、そしておそらく岡寺や室生寺も含めた寺院が複雑な影響関係をもちながら、醍醐寺の如意輪観音信仰を軸としたネットワークを形成していたことを述べた。

なお名畑崇氏により、後期撰関期から院政期にかけて、諸寺院が本尊の靈験を語って靈場化を促進し、靈場巡拝がさかんになり、それに対応して四天王寺、六角堂、広隆寺、石山寺・法隆寺など太子ゆかりの寺院が靈場化を進めていたことが指摘されている（『太子観の展開とその構造』『聖徳太子と飛鳥仏教』田村圓澄・川岸宏教編、吉川弘文館、一九八五年）。これらの寺院が、本論で提示した寺院ネットワークと重なり、時期的にも一致することが注目されよう。真言宗における聖徳太子と如意輪観音を結びつける信仰の創出は、当時太子信仰によって隆盛を極めていた天台宗への対抗という意味もあったかもしれないが、寺院側もまた、靈場化を促進するための新たな太子信仰を求めていたものと推測される。

さらに十一世紀以降、西国三十三所観音霊場への巡礼も盛んとなり、特に石山寺や六角堂、岡寺は如意輪観音を札所の本尊として参詣を集めていた。これら寺院の霊場化との関連についても、さらなる課題としたい。

また根立研介氏により、院政期の法会や新造した寺院の本尊として、あえて靈験ある古仏が用いられたことが明らかにされている（『附論 後白河・後鳥羽院政期の古仏の使用をめぐる』、『日本中世の仏師と社会』、塙書房、二〇〇六年）。石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍、四天王寺金堂本尊、広隆寺泣き弥勒など、その尊名を如意輪観音とよび変えられた像もまた、奈良時代に造像された「古仏」であった。古仏への再注目という点で根立氏の指摘する院政期の動向と一致するが、これらの像については、単なる注目にとどまらず、如意輪観音という新たな意味づけがなされた点も特筆すべきであると考ええる。

なおとりわけ院政期は、真言宗内が小野流と広沢流、さらに野沢十二流、そしてそこからより細かい法流へと分派が進んだ時代として知られる。本論で取り上げた覚性や守覚は広沢流の中核となる仁和寺の門跡であり、従来、小野流の中心寺院である醍醐寺との関わりについては、あまり注目されてこなかった。さらに叡尊もまた、真言律宗の開祖としての印象が強く、醍醐寺僧としての活動についてはほとんど論じられていない。慈円にいたってはその著作に聖徳太子・如意輪観音同体説がみえるものの、天台僧であることから、これが醍醐寺三宝院流の口伝を継承したものであったことは、重要視されてこなかった。すなわち本論で見出したのは、法流や宗派を超えた新たな人的ネットワークの存在であつ

た。

そして第四章・第五章において、このような、いわば特殊なネットワークが形成された背景に、後白河院をはじめとする為政者の意向が密接に関わっていたことを指摘した。近年、歴史学の分野で、後白河院の子息、法親王としての守覚の位置づけや、院の近臣僧としての勝賢の活動への注目が高まっている。本論で取り上げた半跏思惟形の如意輪観音像や宝珠をあらわした仏具は、王権の求めに応える形で生み出された可能性が高い。すなわち院政期の真言密教が王権と結びつきながら飛躍的な発展を遂げる過程で、醍醐寺を拠点として生み出された日本独自の如意輪観音像が重要な役割を担ったことが推察される。日本における真言密教の展開において、仏像や仏画、仏具等、いわゆる仏教美術作品が担った機能について、今後さらに詳しく追究してゆきたい。